

寄稿文

リージョナルステート研究会 10 周年

10 周年記念～設立時の考えと今後の期待～

リージョナルステート研究会(以後RS研とします)の設立趣旨は、北海道が自律するために、私達技術士が何をなすべきか問い、できることから実践していく、能動的な理念と具体的な活動を原点としています。リージョナルステート(Regional State)は地方国家の意味です。

RS研は、まず、1998年7月に「タイタニック研究会」と銘打ってスタートしました。その名前は、危機的な状況の北海道をタイタニック号になぞらえ、氷山にぶつかって沈没するストーリーの前に、英知を結集して危機を回避する意味を込めました。しかし、当時の立上げに関係した10名の方からいろいろな意見が出て、投票によって今の「RS研」に決まりました。1999年4月の北海道技術士センターの定例総会で設立が承認され、同年8月19日に設立総会を開催し技術士41名でスタートしました。設立趣旨は、北海道の自律と活性化のための提言と実行を目的として次の4項目を挙げました。

- ① 経済の自律
- ② 地域特性の主張
- ③ 地方主権
- ④ 国際貢献

この提言と実行の中から新しい技術士像を確立するとし、活動の場として具体的に挙げた中から、テーマ毎に次のチームを編成しました。

- ① 自然科学分科会(座長 池田晃一)
- ② 観光分科会(座長 花田真吉)
- ③ 循環技術システム分科会(座長 船越元)
- ④ 自律的地域構造研究分科会(座長 太田清澄)

その他にも自然エネルギーの活用、道内空港の有効利用等々の様々な提案がありました。活動の原則は、自

分のやりたいことをやるのが原動力であるとし、小さいこと、やれることから実行しようということになりました。

3年目に入った2002年2月のRS研の総会で、その活動内容から私達は「ある殻」を破ったという実感がありました。それは、企業内技術士が技術士会を借りて企業という殻、専門分野の殻を破り、検討の過程で他団体や組織との連携を深めたり、先進知識を吸収したり、技術士間の意思疎通をはかる中から、技術士としてコーディネーターの役割を、積極的に社会に働きかける「新しい技術士像」が出来つつあると感じました。社会に働きかける内容を作るということは、新しい発見であり、既存のシステムや制度に対する挑戦という面もあります。恐れず自ら考え自ら解決する行動こそ、自律であり活性化であると考えてに至りました。

10年前の北海道の課題は、明治開拓の時代から1世紀余を経て、世界や日本の経済環境・社会環境が大きく変貌を遂げ、更に地球環境に対する認識も変わってきました。北海道の位置づけ・役割も大きく変化し、新たな時代に対して、私達が北海道を自ら考え、自ら変革することを求められていることは現在も変わりません。RS研には、北海道をより元気に豊かな社会とするため、その可能性を提言し、実現に向けて行動することを今も求められています。

これからの北海道には、日本や世界に向けて新しい視点と理論構成、継続的な説得が益々必要になることでしょう。社会に向けて、技術士の活動が更に注目される時代になることを願っています。

(文責：RS研初代会長 市村 一志)

寄稿文

リージョナルステート研究会 10周年

前のめりのホップ

「座長やります！」 新年早々？の宴会の席上、勢い余って言ってしまった～が後悔先に立たず……。初代、池田座長の苦悩を見かね2代目を襲名してしまいました。在任期間は確か2003～2005年度だったような気がします（不確かで済みません）。三段跳びで言えば、ホップ・ステップのステップかも知れませんが、当時は長い長い助走で充電し、ようやく一歩目を踏み出そうかなあとしていた頃だったように思います。

思えば「夢の21世紀」を目前にした1999年8月、RS研究会は設立されましたが、その前進である「タイタニック」の頃から教育グループは深く静かに蠢いておりました。池田さんや大谷(論)さんの奔走で2000年2月、「自然科学教育分科会」として誕生しましたが、その頃の技術士の活動といえば、専ら会員間の情報交換と「提言」と称する成果の公表で、子どもを含めた「一般市民」向けの「提言を伴わない」活動は、全く省みられることのない、的外れな技術士らしからぬ活動とみなされました。

今でこそ様々な「教育支援」が技術士の「社会貢献」などとして語られるようになりましたが、当時は「技術士が子どもの相手かよ？」とか、「活動の目標は何？何を提言するの？」的な見方がほとんどで、我々メンバー自身、「教育分科会」を名乗ってはみたものの「何をしよう……」「何ができるんだ？」と悶々とした日々を送っていたことを思い出します。例会を開いても、「最近の学校ときたら……」、「先生の質が……」といった愚痴の言い合いで1～2年が過ぎました。それでも「何かできないか」とあっちこちに顔を出しては「技術士」を連呼してましたね（教育大との交流・連携、ボランティアNPOのワークショップ、雑誌の座談会、弁護士会との交流、区役所主催の研修会……、どれも

これも技術士とは無縁の外向けの活動でした）。

そんな長い助走期間を経て2001年頃からポツリポツリと出前授業の以来が入り始め、2003年度には10件もの依頼が舞い込むようになりました。そうなると思前授業のネタは直ぐ底を着きますし人手も足りません。そこで始めたのが「スカウト」。どの研究会もやっていなかった勧誘を、一次・二次試験の「合格祝賀会」や「支部総会」、あるいは「技術フォーラム」で活動報告がてら一本釣りを始めました。その甲斐あって分科会には大勢の若者（技術士補）たちが、とりわけ多くの娘さんたちが参加してくれるようになりました。今では若手の力が分科会のカラーでもあり、そのことが誇りです。

そんな中、私自身は2001年に「東米里中学校」で教壇デビューし、その後2004年まで娘が通う小学校を含め数回、子どもたちと過ごすことができました。その中で思い出すのは、ある子どもの眼差しです。年度は忘れましたが、1回目か2回目の寿都キャンプでのこと。そのキャンプには地元の「施設」の子どもたちも何人か参加してるのですが、その中の3～4年生ぐらいの男の子が私の許を離れません。その目は「お父さん」と呼びかけているようで切なくなりました。あれから日程の都合などもあって再訪できませんでしたが、娘の高校卒業を期に様々なしがらみからも放免されたので、幽霊会員からゾンビぐらいにはなろうかなあと思うこの頃です。

自分にできることは何か？、自分は何をしたいか？から始まった「教育分科会」ではありますが、義務感や業務命令ではなく、「自らが楽しむこと」を最も重要なルールとしてこれからも継続して欲しいですね。最

初に出会った子どもたちは大学卒業の時期。ひょっとしたらどこかで技術者になっているかもしれません。その子たちに何かの種まきができたのだとしたら、それ以上の喜びはありません。

それでも、「活動の目標は何？」って、まだ聞かれるんでしょうかネエ……

（文責：教育分科会前座長 五十嵐 敏彦）

寄稿文

リージョナルステート研究会 10周年

研究会設立の背景と今後

北海道支部に『リージョナルステート研究会(以下、R S 研)』が設立されてから早10年を迎えたとのこと、まずは会員各位のこれまでのご活躍に深く敬意を表するとともに、自分もその活動の一翼を担わせて頂いてきたことに深く感謝し、ここに、R S 研の設立に関わった者の一人として、設立当時の背景や思いなどについて触れておきたいと思います。

1998年、若干49歳という若さでこの世を去った大橋猛技術士(当時開発局開発土木研究所構造部長)が、生前に執筆された『北海道飛躍のシナリオ』という一冊の冊子が、私達技術士仲間の意識を大きく変えるきっかけとなりました。彼はその著書の中で、大きな魅力と可能性を秘めている北海道は、何時までも日本の中の「一地方」に甘んじているのではなく、世界に立ち向かう勇気と発想を持って自立していくべきだと主張し、様々な提案・提言を行いました。大橋氏のこの主張に強い刺激を受けた技術士数人が、R S 研の初代会長となった市村一志氏の下に集まり、北海道自立のために今何を為すべきかについて何度も熱い議論を戦わせ、その議論の末に北海道自立を考える研究会を立ち上げることが大橋氏の遺志を継ぐことになると考えた訳です。研究会の名称についても喧々諤々の議論を繰り返しました。当時流行ったハリウッド映画『タイタニック』は、世界一の豪華客船タイタニック号が処女航海の最中に冰山に衝突して北大西洋の深海に沈んでしまうというストーリーでしたから、自立できずに埋没寸前の北海道をタイタニック号に擬えて、『タイタニック研究会』にしようとの意見も出されました。しかし、この名称はインパクトは強いものの、「沈没したまま浮上することがない」という暗いイメージが強過ぎるということから断念し、今の『リージョナルス

テート研究会』という名称に落ち着きました。

和訳すると「地域国家」という名称から分かる様に、研究会には北海道を中央政府から自立した一つの地方国家として成長させるために、様々な視点からその可能性を研究していこうという熱い思いが込められているのです。

私は、その中で当時叫ばれ始めていた「持続可能な循環型社会の構築」という視点から、豊かな自然環境と資源に恵まれた北海道を真の循環型社会にするために何をすべきかという議論を技術士仲間と交わしたいという想いで、『循環技術システム分科会』を立ち上げ、初代座長を担わせてもらうことになりました。

「循環技術」という名称の後に「システム」を付けたのは、循環型社会の構築には技術も重要であるが、それ以上に技術を普及させるための社会システムが不可欠だと考えたからです。如何に優れた技術が開発されたとしても、それが社会に普及しなくては何の効果も得ることはできません。

私達が作り上げてきたこれまでの社会が、コスト優先、利便性優先で成り立ち、資源の有限性や環境受容量を軽視してきたことが、今日の環境問題を引き起こしたという反省に立てば、これからは国民一人一人が資源や環境を守るための新たなコストを負担する覚悟が必要になります。しかし、個々人がこうした負担を負うことに国民的コンセンサスを得ることが難しい現状においては、社会全体がその負担を共有し合う新たな社会システムが不可欠であると考えています。

この研究会が目指していることが北海道を自立に導く最善の道と確信しており、研究会活動の益々の発展を期待しています。

(文責:循環技術システム分科会初代座長 船越 元)

寄稿文

リージョナルステート研究会 10周年

「循環研」参加の経緯と提言集のまとめ

『リージョナルステート研究会（以下、RS研）』の会員の皆様、10周年おめでとうございます。北海道の自立を目指し、様々な方面からご努力された皆様の情熱とご活躍が、10年継続されたことに対し敬意を表します。

私のRS研との最初の出会いは、新聞紙上でした。私が所属しております建築設備業界では技術士資格はそれほど一般的ではありませんが、弊社だけは技術士資格取得を以前から奨励しておりました。“いつかは受験”をイメージしながらいたずらに年数が経過しておりました頃、新聞紙上に市村会長の写真入りのRS研の紹介記事を見つけました。北海道自立への強い意志、高度な技術に裏打ちされた社会貢献への熱い想いに強い衝撃を受けたことを覚えています。

その年の技術士試験を受け、口頭諮問へと進んだ際、「技術士試験を受験した動機は？」と聞かれ、「北海道にはRS研という技術士の会が有る。さまざまな専門分野の技術士が集まり、北海道の自立を目指し、情熱をもって活動している。私もその一員となって活動したい。だから技術士になりたい。」と訴えました。

その年の合格者歓迎会で市村会長を紹介していただき、晴れてRS研の会員となりました。RS研では船越座長率いる『循環技術システム研究分科会（以下、循環研）』に籍を置かせていただき、活動を開始する事になりました。

定例会に出席してみると、メンバーの方々はそうそうたる経歴と実力をお持ちの方々ばかりで、大変緊張したことを覚えております。熱い議論が目の前でなされているが、話している内容が分からない。話題がどんどん広がるが、さまざまに視点を変えて、都度議論が盛り上がる。まるで別世界に迷い込んだような気持ち

でした。そんな私でしたが、船越座長の後を継ぎ、二代目の循環研座長を務めることになりました。

活動のテーマは「有機質廃棄物資源の社会循環システムの構築」とし、それまで定例会のたびに議論されていた内容を、提言集にまとめ発信する事としました。

有機質廃棄物は世の中に様々ありますが、それらを地方型（農畜産系・木質系・水産系）と都市型（事業場・一般家庭・下水処理場）に区分し、それらがかかえている問題点とその解決策について述べるとともに、理想的な有機物の循環システムを示しました。循環研のメンバーがそれぞれ得意な分野を担当して執筆を行い、平成16年8月に提言集「循環型北海道を目指して」が完成いたしました。この提言集は、日本技術士会北海道支部のホームページ上で閲覧できますので、ご覧いただけますと幸いです。

この提言書を基に、技術士全国大会や北東三支部交流研修会にて技術発表を行ないました。また、道南の豊浦町で地元の技術者を交えた発表会および意見交換会を実施し、さらに検討を進めました。

社会システムは、さまざまな要素技術が複雑に入り組んで存在しています。それゆえ多くの問題を孕み、解決策を見出すには困難が山積します。この提言のように多分野の技術士が、その専門性を生かし、一つのテーマに対し議論を重ねた結果を示せたことは、大きな意義が有ったと感じております。

RS研は技術士合格のきっかけとなり、その後の循環研の活動では多くのことを学ばせていただきました。RS研の皆様、循環研の皆様に心から感謝するとともに、今後ますますのご発展を祈念いたします。

（文責：循環技術システム研究分科会二代目座長
・RS研前副代表 永瀬次郎）